

平成二十二年度秋季大会研究発表要旨

『平家物語』成立における
一側面

博士前期課程一年 瀬口 結貴

『平家物語』における健礼門院の往生について、諸本ではその地を大原の寂光院と伝えるが、延慶本・四部合戦状本は「東山鷲尾」を納骨あるいは埋葬の地であるとしている。「東山鷲尾」がどのような意味を持つのか、この地に金仙院という私的寺院兼山荘を有していた四条家との関わりという観点から考察を加える。

健礼門院と「東山鷲尾」を結ぶ人物として考えられるのが四条家の藤原隆房である。隆房は健礼門院の妹を妻としており、角田文衛氏は、隆房が壇ノ浦合戦後の健礼門院の最も有力な庇護者であったと推定される。

四条家は代々善勝寺長者の任を継承していたが、『陸戒記』によると、善勝寺の勤行は鷲尾にある金山寺（後の金仙院）で行われており、善勝寺長者がこの寺の管理を兼任していた。『東大寺圓照上人行状』によると、隆房も金仙院を伝承していたことがわかる。これにより、健礼門院と「東山鷲尾」は藤原隆房という人物を介することによって結びつけられる。

また『とはすがたり』巻五に、藤原隆親と後嵯峨上皇の親密さを窺わせる「鷲尾の臨幸」についての記述がみられ、四条家にとつて東山鷲尾・金仙院という地は、栄華の象徴ともいえる地であった。

健礼門院の入滅・納骨の地として、四条家の栄華の象徴となった東山鷲尾の地名が延慶本・四部本に記されることは、四条家と天皇家の緊密さを裏付け、さらにそれが今に繋がっていることを主張する當為の表れと言える。

四条家が伝来した金仙院それ自体も、説話発生の地としての重要性を持っている。『圓照上人行状』に「通憲四世之孫」が鷲尾に住した、という記述がみられることを牧野和夫氏が指摘され、延慶本や四部本に通憲の孫女が健礼門院の臨終の際に侍尼として仕えた、という記述があることとの関連を示唆された。

金仙院の住持が不在となった折に、その仏事を請け負った元応寺は、『太平記』編纂に関わった僧として今日有名な恵鎮によって、京の法勝寺と並ぶ戒灌頂の道場となっている。『元応寺血脈』に、恵鎮に連なる僧として名を記される天台記家の光宗は、天台宗の秘事口伝を網羅する書物『溪嵐拾葉集』の作者であり、これについては田中貴子氏の研究に詳しい。『溪嵐拾葉集』は、教義や修法を説くことの他に、寺社縁起や和歌、説話などを含んでいる点から、近年では中世文学研究者から主に説話研究の観点で注目されている。今回取り上げた延慶本・四部本と天台記家の学問との関連を直接指摘することは難しいが、延慶本に山王関係記事が多くみられる点は考慮に入れるべきである。

以上により、東山鷲尾の金仙院周辺、及び四条家の文学への介入の問題は『平家物語』成立の一側面を担う可能性を秘めるものとして、今後さらに注目されるべきであると考えられる。